

大塚敬節
矢数道明
責任編集

世漢方医学書集成

61 香月牛山 一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 61

香月牛山(一)

第Ⅲ期
全40卷

昭和五十六年十月二十五日 発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行者 銚子名著出版

東京都文京区小石川三ノ木五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七一〇四四番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫



香月牛山肖像

凡 例

- 一、本書第六十一卷「香月牛山(-)」には、『牛山方考』『牛山活套』を収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 牛山方考 版本(天明二年版) 三卷三冊
 - 牛山活套 版本(安永八年版) 三卷三冊
- 一、解説は、難波恒雄(富山医科薬科大学和漢薬研究所教授)が執筆した。
- 一、巻頭の香月牛山肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』(昭和十一年、刀江書院)によった。

——香月牛山先生の事蹟と家譜——

難波恒雄

一

香月牛山は通称啓益、名は則實（則眞とする説があるが、井原家にある『香月統家譜』には明らかに則實と誌されている。但し、木牌には則眞と刻されているので、正名はどちらが正しいか明らかでない）。号を牛山、貞庵、被髮翁と称した。筑前国遠賀郡植木の出身で、明暦二年（一六五六）十月七日、香月家十六代重貞の次男として生まれた。その先祖は香月城主であったが、牛山より四代前の香月考清の代に小早川隆景に征せられ、植木邑におち野に下った。

牛山は若い頃貝原益軒から儒学を学び、また医を藩医鶴原玄益に学んで業とした。貞享二年（一

六八五）三十歳のとき豊前中津侯小笠原氏の侍医として禄をうけ、十四年間さらに医学の研鑽に励んだ。当時の医学は名古屋玄医や後藤良山の唱える古医方が抬頭し始めた頃であるが、一般には田代三喜が明国から伝えた金元医学、特に李朱の医説が行われており、当然牛山もこの医説を学んだ。特に牛山は李東垣の医説を奉じ、後に江戸中期の後世派の第一人者と称された。牛山の医説については後述するが、儒者、本草家としての貝原益軒の実証的研究方法の影響を多分に受けているものと思われる。豊前中津侯に出仕している間、しばしば貝原家に入出入りし、現存する益軒先生の日記によると、貞享三年（一六八六）九月中旬貝原家を訪問し、師の益軒と共に月を賞したとあり、次いで数日後に起こった益軒の妻東軒夫人の最初の重病に際し、数回にわたり来診し治療を行っている。東軒夫人は生来病弱な方でその後も数回重病を患っておられるが、牛山は鶴原正林と共に主治医の一人であった。当時牛山は中津侯に仕えて間もなくの頃で、三十一歳の若さであり、益軒は五十七歳であった。二年後の元禄元年（一六八八）二月の日記には、益軒がひどい腹痛を患い、牛山を呼んで鍼をほどこしてもらったとある。牛山と貝原家との交友は弟子としてまた主治医として甚だ厚いものであった。益軒は牛山の著『医学鉤言』に求められて序文を与えているし、また『香月世譜』には益軒の甥好古が序をしたためている。

牛山は元禄十二年（一六九九）四十四歳のとき、眼病を理由に中津侯を辞して京都におもむき医の門を張るが、豊後に居住する間にも既に名医の誇高く、多くの薬方を創製している。その一

端は『牛山方考』や『牛山活套』に誌されている。例えば、「元禄四年（一六九一）五、六月の間久霖ながあめして土民悉く暑湿の氣に感じて頭痛裂くが如し。啓益為に一方を製す。胃苓湯に柴胡、黄芩を加えて本とし、熱甚しく大便秘せば黄連、石膏を加う。大便泄するには白扁豆、升麻を加う。腹痛には木香、砂仁を加う。咽渴には葛根を加う。頭痛には羌活、川芎を加う。眼中黄ばむには茵陳を加えて之を用い、手に應じて効有り。津城三千戸及び國中の人其の靈方の応驗を聞傳えて藥を乞う者門に満つ。毎日此方を修合して人に与うる事百を以て之を數う。奇々妙々秘すべし秘すべし」さらに「元禄六年（一六九三）六、七月の間大いに旱し金流れ石爍えきる。八月の初めより俄に收斂清肅の令行れ暴風霖雨白露忽ち霜に變ず。國中の諸人一般の時疫に感じ、其病狀發熱、惡寒、頭痛裂くが如し。咳嗽し身体重く頭冷えて氷の如く、或は泄痢を兼ね、或は瘡の如し。啓益之を治すに黄連香薷飲に蒼朮を加えて百発百中す云々」と、多くの加減法を工夫している。また「元禄九年（二六九六）八月十四日の夜の五更に夢中に白衣の神来たり告げて曰く。汝臙瘡の治しがたきに工夫をかもう。荆防敗毒散の症あり、白芷升麻湯の症あり二方共に効あり。但し雁来紅を加うれば甚だ妙なりと。夢覺めて本草を考うるに雁来紅は青箱子の條に出で、其の功能をしるさずといえども青箱の種類にて其の功能青箱にひとしかるべし。青箱の主治、邪氣皮膚中の熱を解し、風瘙、身癢、疥癬、惡瘡を治し、三蟲を殺し、金瘡の血を止むとあれば、此物業の色鮮紅べにいこうにして血分に入り、雁来の節紅なるを以て臙瘡を治すの妙あるべき事疑惑すべからず。實に神人の靈夢たる事

を知りて、腫瘡を治するに此二方を用ゆるに雁来紅を加えて効をとる事神の如し、奇々妙々秘す可し」とあり、神夢にたくして薬方の工夫の一端を誌している。

牛山が上京した頃、たまたま大覚親王が舌瘡を病んでおられ、多くの医者が診察して薬を与えたが効果なく半年が過ぎた。そこで牛山が診察に呼ばれるのであるが、牛山はこの病は鬱痰であつて吐かさねばならない。他の医者達は毒薬を用いるのをおそれて種々議論するばかりだから治らないのであると云つた。たまたまこのことが時の天皇のお耳に入り、天皇からの御命令で親王を治療することになった。牛山は劇薬を用いて痰を吐かしたところ、大量の痰が二ヵ月余りで病が治つた。このことから一躍名医の名が高まり、二条に居を構え、後世派の大家として門前市をなしたといわれている。

京都在住中は牛山にとって油の乗り切つた頃で、患者の診療の傍ら、松岡玄達や義山上人などの多くの文化人との交流を行い、自身の知識の培養に務めた。牛山は生涯妻をめとらず、二条の屋敷にも下僕をおかず、兄香月五平次秀房の次子三郎左衛門則實を養子として学問をさずけるかたわら、日々万巻の書を座右において、読書、執筆を事とした。庭には奇草、名花を植えて娛しみ、六医仙を閤に貌して之を崇め、悠々自適の生活であつたが、そこは医者であるため屋敷をはなれての往診や出張診察なども結構あつたようである。「宝永戊子（五年、一七〇八）の秋より冬に至り、明くる己丑の歳の春まで、日本六十餘州おしなべて麻疹流行して男女老少を問わず一般

の疫麻也。貴となく賤となく此患にて死する者多し。予京師の高倉の旅館にあつて此病を治する事五百三十餘人也。其内一人も死する者なし。皆之を治するの醫或は寒涼を過し、或は辛熱を用い、或は補藥を用いて其害夥し。予一方を製す葛根連翹湯と名づく。葛根、連翹、升麻、白芍藥、酒茺胡、酒黃芩、當歸、桔梗、山查、蘇梗、山梔子各等分、甘草減半、水煎し服す。紅点出がたき者には防風、牛房子を加え、泄痢ある者には扁豆、砂仁、木通、車前子を加え、咳嗽甚しき者には桔梗、甘草を倍し、前胡、桑白皮を加う。熱甚しきには酒黃柏、酒黃連少許を加え、或は淡竹葉を加え、口甚だ渴する者には麥門冬、石膏を加え、血乾いて大便秘するには川芎、生地黃、紅花、大黃小許を加う。此方を用ゆるに百発百中奇々妙々其効言うべからず也」と『牛山活套』にある如く、日夜医術の研鑽を積んでいた。

享保元年（一七一六）度重なる小倉侯小笠原氏の招聘により、嗣子則實を推挙し、自らは客分として月俸十人扶持、監輿料十五石、白銀二十枚を賜り小笠原忠雄、忠晴兩君に仕え、小倉に住し、専ら著述に専念した。時に牛山六十一歳、被髮翁と称した。京都には弟子である対馬侯の家臣橋辺半五郎の猶子、香月正安則治を養子として後を嗣がしている。嗣子則實は忠雄、忠晴兩君に仕えること十三年、享保十三年（一七二八）三月九日病を得て四十八歳で世を去るが、次いで、宗対馬守殿の家臣梯治左衛門の子、香月玄洞則道を養子として小倉侯に仕えさせたといわれている。しかし則道を養子としたのはいつの時点かは不明で、則實、則道共に小笠原忠雄、忠晴兩君

に仕えてゐるから、則貫の死の後則道が出仕したとは考えられず、恐らく則治同様早くから養子としていたのであろう。牛山翁は永年養つた則貫の死により更に仏心が厚くなったのであろうか。享保十五年（一七三〇）七十五歳のとき菩提寺である香月の吉祥寺に自ら寿塔を建立し、先祖である香月七郎則宗侯の坐像を刻ませて奉納している。寿塔には兼好法師の故事にならつて、「所から花の香月も清ければ かげをならびの岡にたぐえん」の句が刻まれており、遙か京の地を偲びながらの生活がうかがわれる。この吉祥寺は香月家の高祖香月庄司三郎秀則の弟、弾左衛門則茂の次男で、聖光房弁阿上人（一一六二―一二三八）が建立した寺で、宇井伯寿氏の『日本仏教概史』に「聖光房弁阿は、初め叡山東塔の觀叡及び宝地房證真に学び、達磨宗の大日能忍に禅要を問ひ、後三十六歳（一一九七）法然に従ひ瀉瓶相伝え、故郷に帰り筑後に善導寺を建てたが、弟子に然阿良忠（一一九九―一二八九）があつて榮え、此系統を鎮西派といい、現今の浄土宗である。弁阿の説は法然の説を其のまま継いだと称せられ、諸行非本願説を取つて、二類各生義であるといわれる」とあるごとく浄土宗鎮西派の第一祖弁阿（鎮西上人）を開祖とする。ここには興則、則考、經考等香月家が隆盛を極めた頃の先祖の墓があり、牛山翁も将来ここを墓地と定めたのである。元文五年（一七四〇）三月十六日、八十五歳の高齢で天寿を全うされ、吉祥寺の小高い岡の上に納骨の墓が建てられている。没年八十五歳は、奇しくも師貝原益軒と同年配であつた。なお後年弟子達により、小倉の圓應寺にも墓が建立されている。この圓應寺には嗣子則貫が葬られ、

同寺の過去帳の享保十三年の項に「仰岩信水居士 三月九日 香月市左エ門事」と誌されているが、墓はない。

二

李朱医学は、元の李東垣、朱丹溪の医説であり、これは日本において田代三喜の弟子曲直瀬道三によって大成され、いわゆる道三流が樹立されるが、これによりわが国の医学に一つの転換が起こるのである。これを、宝暦以後に盛んに行われるようになった宋以前の医説、即ち傷寒論を基点とする医説である古方派に対して、後世派と呼んでいる。牛山も当然時の趨勢として宋儒性理の説に出た金元医学のうち李朱の医説を信奉するのであるが、「中華の醫書とて誤謬尠なからず、古人の説とて精確なるものみにあらず」と自家の医説、特に自然觀をのべた『螢雪余話』五卷（二七二七）に誌しているごとく、自らの医療経験に基づき、他の後世派の医家が先人の論説を守株して自ら弁じないのをなげいている。特に朱丹溪が劉、張、李三家の説を折衷して体系づけた陽有余、陰不足の説を難じ、有余不足は皆自然の常ではない。人皆嗜慾を恣にする故に、陰血を耗散して陰不足となるのである。丹溪が之を人身の常体と見て論を立てたのは誤りであるとし、さらに張介賓が出て之を駁するも、枉れるを矯めて直きを過るを免れず、李挺がその著『医学入門』で之を陰火論に改めたのは、さらにその真を誤ったものであると見識ある所論を述べている。

疾病は元氣の不足と、外邪内傷のために氣の流行が防げられて起るものとして、「四時の邪、人の元氣を惱まし、七情の過、人の元氣を惱ます。又飲食過飽して脾胃に滞り、人の元氣を惱す。是れ外感内傷の邪共に元氣の賊なり。人の元氣に氣血、陰陽あり、故に氣虛、陽虛あり、共に元氣の不足なり」と一氣の流行をもつて學說の基とした。さらに病というものは、古今時を異にするによつて相異なつてき、病の形狀も世の変遷に従つて異なるものであるから、先人の説とて現狀に照らして弁じなければならぬと誠に穩健な説をのべている。

金元四大家のうち牛山に最も影響を与えたのは李東垣であり、『牛山活套』に「眼目の方は東垣に本づきて治すべし、獨り眼病のみに非ず、諸病共に東垣の治方に因つて治すべし。辨惑論、脾胃論、蘭室秘藏を常に誦すべし。世醫は只東垣は醫中の王道とのみ心得て、補藥を用いると計り思い、補中益氣湯より外他の方を知らざる類の者多し。東垣の血脈に至らざる者也。笑う可き事なり、予が東垣を信ずる事は口授心傳多秘すべし」と意見を述べている。東垣の説は、脾胃を補うことにより、五臟六腑さらには全身の機能が活発になり、それで疾病が治癒するという、いわゆる温補派であり、「補中益氣湯」や「升陽散火湯」など補劑として新しい処方を創製している。

牛山はただ温補のみでは東垣の心髓を理解しえず、その治療上の口伝をよく参考にすべきであるとし、温補のみに偏つた治療を暗に難じている。このようなことは更に人參の藥効の項にも「近時の庸醫多くは補に偏也。傷寒の危症を見ては虛實の辨もなく、大料の獨參湯を用い、己が本藥

の中にも人參を加う事一錢二錢に至る。修合の劑はわづかに一錢の内外の分量なる小劑に多分の人參を入用によつて、方の君臣佐使の差別もなく、只病人をして洊に人參を服せしむ。故に邪氣を補住して熱洩る事あたわず。多くは死に至る。其中百にして一人も脾胃つよく元氣壯なる者、自然と熱盡きて愈る類あれば、其れを証拠にして己が術を衒い能く券る。又是の如く人參びたしにしても死する者は、かほどに大いなる補い湯を用いても其補及ばざれば、術なしとて己が術の拙きを人參にて飾る。病家は素より愚昧なる者多ければ其理をさとらず、人參の價貴き物なれば其程の効なくては叶うまじと思ひ、世俗の風習となりて人參を用いる醫師を上手と號して治を委る也。適此道理を覺りたる病家あれども、醫師の説に此病は治すべけれども病家吝かにして人參を買ざるにより見すみす病者を殺すなど云、此時父母の病にあたりては否と云い難く、貧家は婦を賣り子を販ぎて父母の命を救わんとす。況や富家の財を費す事あげて數え難し。是の如く金銀を費すのみか病苦を増し百年の天數を夭折す。嗚呼嘆くべし云々。近來是の如く補藥を用いる事は治世の人は生質虚怯なるを以ての故也。大明三百年の治世にして人必ず幼より氣を遣いて形を安逸にする故に、世間の人生質虚弱なる上に猶元氣虚怯す。薛己出でて天下大補を用いて其効多し。日本も百有餘年の治世なれば大補行いて其利多し。是を以て世醫補に偏也。然れども其用時節を知らず、慢りに人參を用いるによりて其害夥し、又かく云えば人參を嫌う事蛇蝎の如くする醫あり。是亦瀉に偏して其害猶夥し。醫たらん者は補瀉の間を工夫を詳にして治療すべし、怖るべし慎む

べし。」とあり、誠に中庸の説である。

このように牛山の醫説は一方に偏ることなく實際的経験の上にたつて治病の腕を振ったが、その患者は高貴の方を多く対象にしたようで、丁度李東垣がその交際上流階級の不摂生な生活をする人達と接することが多かったため脾胃を補う治療がよく適合したのと同様、その主とするところは温補剤であつた。それはまた、元禄、享保の頃の人達の生活にもよくマッチしたのであろう。

牛山の用いた処方方は『局方』『回春』『東垣方』などからのいわゆる世に云う後世派の処方が多いが、それを加えてしばしば家伝の秘方なるものがでてくる。香月家は後に述べるように代々香月城主であつて、その家系を調べてみても医家はいない。それ故、いつ頃どのようにして家伝の秘方が伝えられたのであろうか。家伝の妙薬の例を二、三あげると、『活套』に「……香月の家傳神通の振葉を用うべし、香月兵部少輔經考朝鮮の醫李整菴に傳所の神通湯」とあり、また『方考』に「清疳丸香月堅意齋朝鮮の醫羅整菴一徳に所傳の秘方也」「保童圓 香月家方也 此方は日本の製作にして武衛殿の家に傳來するを香月堅意齋大内の家より傳て家の秘方とす」「神通湯 香月兵部少輔經考朝鮮の醫李整菴に傳する所の方」などがあり、一つは朝鮮の医師が伝えたもの、一つは、日本の他家の秘方を伝えたものである。これらの処方方を伝え残した香月兵部少輔經考は香月家十四代の比較的案運の盛えたときの城主であるが、牛山が著した『香月世譜』に「永禄七年甲子（一五六四）七月六日、朝鮮國全羅道の醫師、李整菴一徳と云者來る。先宗像の江口に着岸し、大宮司氏貞に

謁し、其后香月に來り經考に謁す。硯一面扇子十本沉香十斤を献ず。經考禮を厚し金銀吊綿を給て歸しむ」とあり、この李整菴から藥方を聞き家伝のものにしたのである。經考が堅意齋と号したことも『世譜』から明らかである。なお消疳丸の項の羅整菴は李整菴の誤りである。また大内の家より伝えしものというのは、香月家からみると主筋にあたる山口の大内殿で、十二代中興の主興則の三男經信は幼いときから大内殿に仕えており、その後も代々盟友を結んだ間柄である。このように香月家伝の藥は經考の時に集められたものが、戦乱の世にかかわらず伝えられたものと云えよう。

牛山は三十歳で医をもつて中津侯に仕えてから、京都時代、小倉時代に非常に多くの著書を残している。それらのほとんどは仮名混り文で、大衆啓蒙に務めたことが感じられる。特に『婦人寿草』『小児必用養育草』『老人必用養草』の養生三部作はその傾向の強いもので数度にわたって再版されている。また医者としての心得を述べた『習医先入』は、牛山の医に対する誠実さを示したものと云えよう。牛山の著は他にもあるかも知れぬが、現在判明したものを列挙すると次のごとくである。

『婦人古土富貴草』

年代不明

『香月世譜』一卷

元禄元年（一六八八）自序

『婦人寿草』三卷三冊

元禄五年（一六九二）自序、宝永三年（一七〇六）刊、宝永五年（一七〇